

【ポスター発表】

放課後児童クラブ職員の保育・教育力アップに寄与する研修に関する一考察  
—放課後児童クラブ職員を対象とした質問紙調査の結果と内部研修の様子から—

○ 名古屋経済大学 関谷 みのぶ (004555)

堀 美鈴 (名古屋経済大学・009383)

キーワード：放課後児童クラブ・質の向上・内部研修

## 1. 研究目的

放課後児童クラブ（以下、児童クラブ）の運営や設備に関して「放課後児童クラブ運営指針」（以下、運営指針）が2015年に策定され、研修を受け資格を有した放課後児童支援員（以下、支援員）の配置も義務づけられるようになった。また、子どもの放課後の事業が拡大している中で、子どもの育ちに沿った質の高い事業運営が求められている。利用児童の生活からみると、児童クラブは、普段は、下校後の多くの時間を過ごし、学校休業日には、1日の大半を過ごす場所である。したがって、児童クラブが子どもの育ちにとって適切な環境となる必要がある。つまり、児童クラブの保育・教育力アップのためには、支援員と補助員（以下、合わせた場合、指導員）の資質向上は欠かせないのである。ここでは、アンケート調査から、指導員の職務に関する実態を明らかにするとともに、併せて行った児童クラブ内研修から、指導員の質の向上のための方策を探る。

## 2. 研究の視点および方法

指導員の資質向上のために、経験年数別やテーマ別の外部研修が、自治体などで実施されている。外部研修も重要ではあるが、秋田（2009）や大豆生田（2009）、松山（2011）らによると、園内研修は、各園が抱える課題をテーマにできることや保育者が自園の課題を見つけ、共に学び合いながら解決すること、職員の円滑な人間関係が構築できることがメリットであると述べている。保育所と児童クラブとは異なるが、生活の場所としては同様の役割を担った場所と考えられる。したがって、内部研修の有効性に着目し、アンケート調査と内部研修から明らかになった実態について考察を行う。

アンケート調査を指導員に対し、2回実施した。初回は、2017年9月から10月にかけて合計50名に、2回目は、2018年1月に合計49名に実施し、分析した。44名は、継続回答者である。そして、内部研修の様子をビデオに撮影し、研修後確認を行った。研修は、児童クラブを実施している児童館・センターでアンケートと同時期に実施した。なお、児童館・センター職員にもアンケートに回答してもらい、研修にも参加してもらった。

## 3. 倫理的配慮

アンケート項目については、A市に事前に内容の確認を行い、了承を得て行った。本研究の協力者には、調査主旨や研究への使用、個人情報保護については質問紙に明記したうえで、アンケート実施の際、上記に加え、協力は自由意思に基づくこと、データ管理につ

いては、研究者が責任を持って行うことを口頭にて説明し、同意を得た。研修ビデオ撮影についても同様に、発言の確認のための記録として撮影し、個人情報保護やデータ管理については、研究者が責任をもって行うことを口頭にて説明し、同意を得た。

#### 4. 研究結果

アンケート結果では、運営指針第3章1(4)の育成支援の内容(8項目)について、4段階で自己評価したところ、初回回答、2回目回答ともに、概ね「できている」「ある程度できている」に収まっている。2回目回答では、初回より自己評価の全体的向上がみられた。

指導員の専門性の必要の有無について尋ねた項目では、「あまりあてはまらない」という否定的な回答が8%みられたが、「とてもあてはまる」は半数を超えている。回答者の81.6%が研修を経験している。2回目に実施したアンケートで、前回の内部研修後「あなたの自身の意識が変わった」か、「児童クラブ職員の雰囲気が変わった」かどうか尋ねた項目では、肯定的な回答をした割合がそれぞれ93.6%、89.3%であり、内部研修が自らを振り返る契機となったといえる。

保育や教育に関わる免許・資格の保有者数は、保育士12名、幼稚園教諭18名、小学校教諭11名、中学校教諭9名、高等学校教諭7名であり(複数回答)、無資格者は16名であった。前職の経験がある者(42名)のうち、教育保育系は18名(複数回答)であった。

#### 5. 考察

研修時の発言の記載はないが、目に見えるその時の子どもの姿ではなく、「子どもの主体性」や「子どもの育ちのために」といった方向性に焦点をあてた発言が多くみられるようになった児童クラブは、質の向上に指導員が主体的に取り組んでいるように見受けられた。また、子どもへの関わり方が異なっても、指導員同士でねらいが共有されているようであった。指導員が保有する免許・資格や経歴は多岐にわたることから、子どもと関わるうえでの土台も異なるといえる。また、指導員の養成校があるわけではないため、指導員は、児童クラブで働く中で、これまでのキャリアを基礎にスキルを獲得していくことになる。そのため、身近な指導員モデルや子どもとの関係性によって指導員の力量形成のなされ方が異なることになるだろう。多様なキャリアを持つ集団は、子どもの育ちにとっては望ましい。だからこそ、内部研修を実効性のあるチームづくりのための研修とする必要がある。

#### 【参考文献】

- 秋田喜代美「保育者の資質を高める園内研修とは一振り返り、課題を見つけ、改善を図るサイクルを」『これからの幼児教育を考える 2009 秋号』ベネッセ次世代育成研究所、1-5
- 大豆生田啓友「保育者の資質を高める園内研修とは一ポイントを押さえて研修をより効果的に」『これからの幼児教育を考える 2009 秋号』ベネッセ次世代育成研究所、6-9
- 松山益代(著)秋田喜代美(監修)『参加型園内研修のすすめ—学び合いの「場」づくり—』ぎょうせい、2011